

1. 失語症者の社会適応に影響を及ぼす要因

大貫典子¹⁾ 立石雅子¹⁾
千野直一¹⁾ 鹿島晴雄²⁾

【はじめに】慢性期の失語症者の中には言語障害を残しながら意欲的に生活している患者も、障害は軽度であっても喪失感が強い患者もいる。かかる差異を生ずる要因の検討は社会適応を考える上で重要である。本研究では coping という見地から適応の良否に関する患者、及び家族の主観的判断を重視して適応良好例を定義し、患者個人の要因が適応に及ぼす影響について多面的に検討してきた。

【対象・方法】対象は慢性期の失語症者58名。SLTA, CADL, 患者の病前, 病後の性格等に関する精神科医による面接等を行った。

【結果及び考察】失語型が失名詞, Broca, Wernicke と判定された55例では SLTA 総得点と CADL 得点は0.88と高い相関を示した。言語機能の障害のレベルを重度と軽度の2群に分けると, Broca 失語, Wernicke 失語とも適応良好例は重度群, 軽度群双方に認められた。重度群での適応良好例は人格変化のある例が多く, Werni-

cke 失語で特にその傾向が著明であった。コミュニケーション能力は言語機能とそれ以外の機能を合わせたものであり, 適応の良否が反映されると考え CADL を検討したが, 一定の関係は認められず, SLTA, CADL のみでは適応の良否は判断できなかった。患者個人に関する適応良好の要因をまとめると, 失名詞失語など軽度群では適応良好例は家族の評価とSTの評価の一致度が高く, 本人は適度な要求水準を示し, 病前性格は循環気質である例が多かった。軽度群では家族の理解と本人の適度な要求水準, 及び病前性格が適応良好の肯定的要因となっていた。

重度群でも家族の理解と本人の適度な要求水準は重要であった。加えて, 人格変化のある例では病前性格が執着気質でも適度な要求水準を示す例が増加することから, 要求水準との関連において器質的人格変化が適応良好に関して肯定的に働くことが示された。

1) 慶應義塾大学病院リハビリテーション科

2) 慶應義塾大学医学部精神神経科